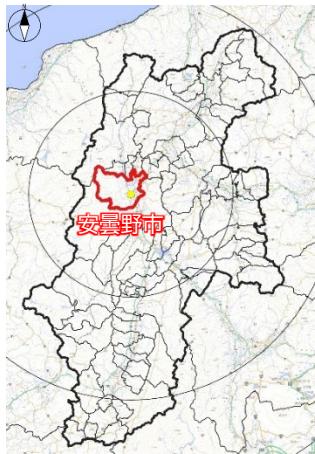


13 安曇野市文化財保存活用地域計画【長野県】

【計画期間】令和8～15年度（8年間）

【面 積】331.78km²

【人 口】約9.2万人



▲指定等文化財件数一覧

※国選の「安曇平のお船祭り」は県および市の文化財に指定されているものと重複しているため、表中では（ ）とする

大分類	中分類	細分類	国指定・選定	国選択	県指定	市指定	国登録	計
有形文化財	建造物		2	-	3	35	45	85
	絵画		0	-	0	5	0	5
	彫刻		1	-	3	21	0	25
	彫刻・絵画		-	-	-	1	-	1
	工芸品		0	-	0	1	0	1
	書跡・典籍		0	-	0	4	0	4
	古文書		0	-	0	7	0	7
	考古資料		0	-	1	0	0	1
	歴史資料		0	-	0	4	0	4
	石造物		-	-	-	11	-	11
無形文化財			0	0	0	0	0	0
民俗文化財	有形の民俗文化財		0	-	0	13	0	13
	無形の民俗文化財		0	(1) ※	2	13	0	15
記念物	遺跡		0	-	1	17	0	18
	名勝地		0	-	1	0	0	1
	動物・植物・地質鉱物		4	-	11	26	0	41
文化的景観			0	-	-	-	-	0
伝統的建造物群			0	-	-	-	-	0
	計		7	(1)	22	158	45	232

指定等文化財は232件、未指定文化財は19, 703件把握

歴史文化の特徴

雄大な大地からの恵みを賢く多彩（才）に活かし切った
暮らしの歴史文化

1) 暮らしの礎「安曇野」を創り伝える歴史文化

当市には、東西の異なる地盤が作用して誕生した大地を先人が拓き創り出した「安曇野」を暮らしの礎にして人々が様々な恵みを生み、これを肌で感じながら学び受け継ぎ、後世に多様な形の文化として伝え残してきた歴史がある。



2) 大地からの恵みで育まれた「暮らしを守り支え合う」歴史文化

国内でも有数の山岳環境の麓の土地という厳しい環境条件の中で、自然と闘い、時に水や土地をめぐる地域の争い等にも苦しみながらつくりあげてきた暮らしを、お互いに「守り支え合う」歴史文化が市内各所に息づいている。

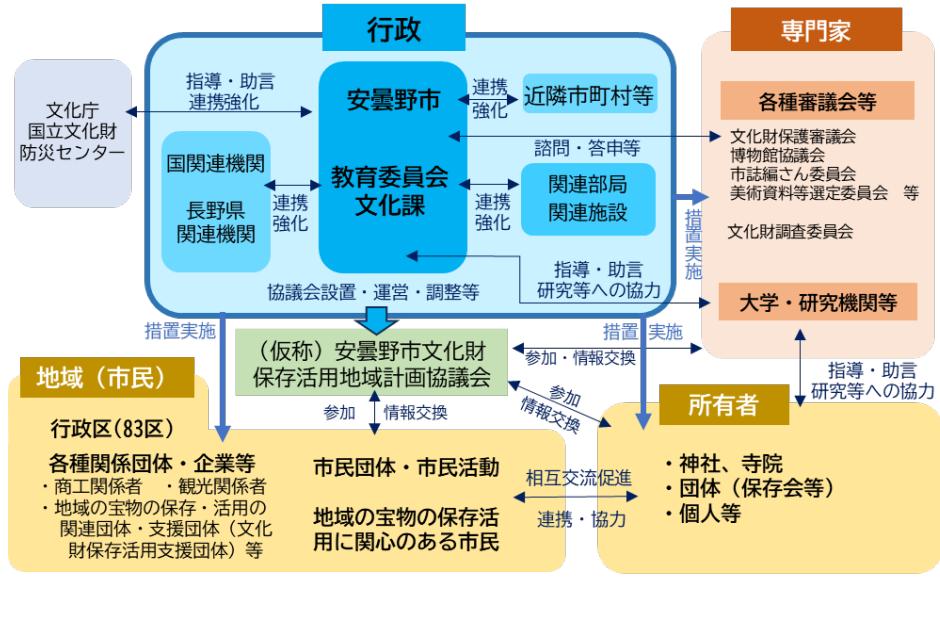


3) 恵みを活かして「暮らしの糧を生み出し活かす」歴史文化

当市には、東西の地質や地形の違いに由来する多様な自然資源の特性を時代や環境の変化に合わせて読み解き、そこから恵みを生み出し、さらに新たな形で活かしていく歴史文化が息づいている。



▲推進体制



基本方針

**基本方針1
地域の宝物を知り、関わる**

市民に気づきや発見を促すことができるよう、地域の宝物の成り立ちや人の関わりに着目した基礎的な調査を進め、その成果を効果的に伝え、理解する機会を増やし、将来像実現に向けた土台をつくる。

- 地域の宝物の把握と追跡が十分ではない
- 地域の宝物の価値の調査と市民の理解が進んでいない
- 地域の宝物と市民との接点が限定的

- 1-1 身近な地域の宝物を掘り起こす
- 1-2 地域の宝物の価値を把握し伝える
- 1-3 市民と地域の宝物との接点をつくる

**[1] 安曇野の風景を構成する文化財調査
(文化的景観地基礎調査)**

「安曇野の風景」の構成要素となる未指定文化財の重点調査を過去の関連調査成果の整理も含めて行い、その価値と特性を把握し発信する。



- 行政、地域（市民）、専門家
- R8～15

[7] 新市立博物館整備及び既存博物館施設の再編

平成27年度に策定された構想を見直し、新市立博物館整備・既存博物館施設再編の実現に向けた筋道をつける。

施設整備の準備と連動し「地域の宝物の再発見や体験活動」や「人材育成」を進める。

- 行政、地域（市民）、専門家
- R8～15

**基本方針2
地域の宝物の価値を実感しながら守る**

**基本方針3
地域の宝物を受け継ぎ育てる**

集落や学校等の生活に身近な様々な単位で、より多くの市民が価値を理解・実感する機会と地域の宝物の保存が連動する流れを生み出す取り組みを推進する。

- 地域の宝物に関する体験の機会が限定的
- 社会の変化や災害に伴う地域の宝物の消失リスクの増大
- 地域の宝物の維持と現在の生活様式とのギャップへの対応

- 2-1 地域の宝物にふれあい体験する機会をつくる
- 2-2 様々な変化に対応して地域の宝物を守る
- 2-3 地域の宝物のもつ新たな価値を生み出し保つ

**基本方針3
地域の宝物を受け継ぎ育てる**

地域の宝物の受け継ぐべき価値を意識しながら、市内外の人と人の縁を活かして知恵を出し合い、時代に合わせて新たな形に育て、未来につないでいく視点をもって、将来の担い手の確保や継承のしくみづくりに取り組む。

- 新たに関わる人材の掘り起こしが不十分
- 従来の活用体制を支え、補う仕組みや工夫の不足
- 交流人口創出を契機にした地域の宝物の継承策の具体化

- 3-1 地域の宝物を共に支え合う仲間を増やす
- 3-2 持続可能な継承に向けたしくみと体制を整える
- 3-3 内外の人と地域の宝物をつなぐきっかけを生み出す

課題

方針

措置の例

[21] 修復等の補助事業

指定等文化財の劣化や破損等の対策に要する費用の一部を行政で支援し、所有者の負担軽減を図る。

- 行政、所有者、専門家
- R8～15



[29] 本陣等々力家活用

本陣等々力家の価値を維持しながら、建造物・敷地等の有効活用に必要な整備の推進を図る。

- 行政、地域（市民）、所有者、専門家
- R8～15



[35] 市民の専門サポーターの確保

市民の参加する博物館・美術館・記念館等での調査研究や普及啓発活動を通じて人材確保を進める。

- 行政、地域（市民）、専門家
- R8～15



[39] 祭り継承活動支援

地域のつながり維持に重要な祭りの継承に向け、特に協力者確保のため、地域との連携のもとで対策を講じる。（例：お船祭りの担ぎ手募集等の支援等）

- 行政、地域（市民）、専門家
- R8～15



7つの関連文化財群

関連文化財群A

「命の水」でつながる 田園や山麓の集落景観

当市の西側一帯は幾つもの川が形成した“大複合扇状地”である。それぞれの扇頂部と、それらの川が一か所に集結する扇端部の沼地は水が豊富であったが、広大な面積を占める扇央部では水の確保が容易ではなかった。さらに、北アルプスの水は、稻が育つにはやや冷たく（水温11度前後）、このような条件でコメをはじめとする食料を生産して暮らしが営むために、先人は様々な努力を続けてきた。当市の水路や住まい、集落の景観には、先人が過去から積み上げてきた知恵や工夫が深く刻み込まれている。



関連文化財群D

日々の暮らしを守る絆と 思いの結晶

北アルプスの麓に誕生した複合扇状地、そして、その対岸に位置する山裾に広がる原野を切り拓いて暮らしの地を獲得してきた先人は、自然からの恵みを最大限享受しながら、災害や疫病等の脅威から身を守るために、お互いに力を合わせて様々な工夫を講じてきた。



関連文化財群E

集落・地域 それぞれの願いを込めた祭礼

北アルプスの麓の大地に暮らし始めた人々は、自然の恵みを最大限に享受することによって生活を維持し、その脅威から身を守るために様々な工夫をしてきた。その中でも、人の力を超えるような存在を感じ取って神と名付け、神に願いを聞き届けてもらうために捧げものをし、歓待するとともに、一定の形式をもって続けてきたのが「祭り」である。家族、木戸、集落、村等の集団ごとに結束して行われてきた当市の「祭り」は、土地の違いに応じて異なる神への願いや集団の規模により、多様な形で現在に受け継がれている。



関連文化財群B

山々の豊かな自然と その実りを伝え継ぐ環境

北アルプスの造山運動を始め、今から2万200年ほど前からの自然の営みは、多様で複雑な地形、地質と気象現象を生み出し、これに適応した様々な生き物たちを育んだ。その後、当市域にも水や自然からの実り・恵みを活かした人間の暮らしが誕生・定着した。特に山と川の恵みが得やすい東山の丘陵地や河岸段丘上の山裾、西山の山麓一帯にその先駆けがあり、山々の豊かな自然とその実りを長きにわたり伝え継いでいる。



関連文化財群C

多才な先人の足跡

先人は、時に厳しい環境をもたらし、一方で時に様々な恵みをもたらす「安曇野の大地」の中で様々な技を育み、豊かな環境とふれあう恵まれた学びの場を生み出し、後進につないできた。その中で感性を高め、磨いた人々が巣立ち、時に故郷と行き来して、芸術、文学、芸能等様々な分野に足跡を残している。



関連文化財群G

里と山の道筋・川筋の 物流の発展と交易

肥沃で災害の少ない場所に散在する形で生まれてきた当市の集落は、治水や土木技術の発達とともに相互につながりを持ちつつ、徐々に拡大してきた。これにより、人や物の行き来が盛んになり、一帯の経済や文化が発展した。その道筋や川筋を活かした物や人の動きの違いは、東西の地形と水の流れの違いに由来する特徴的なものである。また、寺院や神社ともつながる信仰の道としての役割も果たしている。



関連文化財F

自然の恵みを巧みに取り込む 暮らしの姿とその糧

江戸時代の横堰の整備や新田開発で、扇央部に水田耕作が広がったが、江戸時代後期から明治時代初期の有明村の西部、小倉村等の区域は、水田耕作が難しい条件に変わりはなかった。先人は生活の糧を得るべく、工夫を凝らし、扇央部では桑を育てての養蚕、自生するクヌギで育てる天蚕、扇端部、湧水池では梨栽培等に取り組んだ。明治維新以降、近代化に伴い様々な技術開発が進む中、こうしたエリアの環境の特性を十分に知り尽くした先人は、新たな技術を巧みに生業の中に取り込み、様々な糧を得て、安定した暮らしの支えとしてきた。

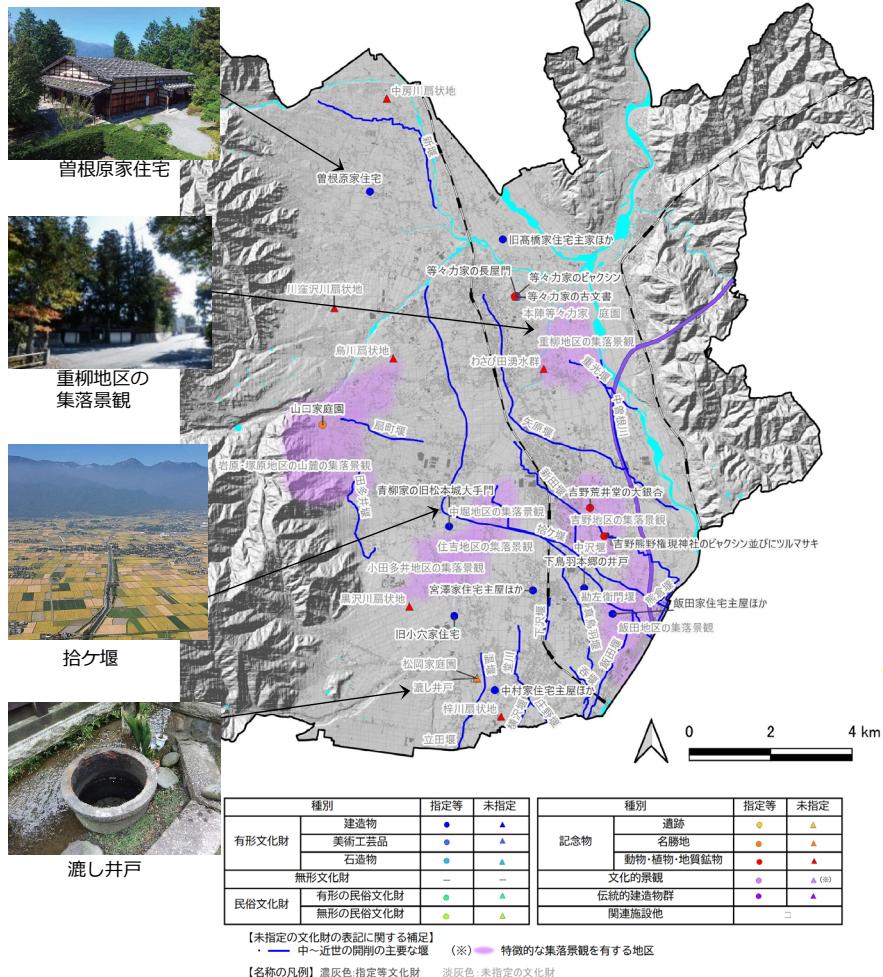


【関連文化財群A】「命の水」でつながる田園や山麓の集落景観

概要

当市の西側一帯は幾つもの川が形成した“大複合扇状地”である。それぞれの扇頂部と、それらの川が一か所に集結する扇端部の沼地は水が豊富であったが、広大な面積を占める扇央部では水の確保が容易ではなかった。さらに、北アルプスの水は、稻が育つにはやや冷たく（水温11度前後）、このような条件でコメをはじめとする食料を生産して暮らしを営むために、先人は様々な努力を続けてきた。当市の水路や住まい、集落の景観には、先人が過去から積み上げてきた知恵や工夫が深く刻み込まれている。

構成文化財の分布マップ



関連文化財群に関する課題と方針

【課題】

- 集落景観の主たる構成要素である民家や屋敷林についての調査は、直近の実施から10年以上経過しているが、その後の変化を確認できていない。
 - 居住地内にある民家や屋敷林、利水環境などの成り立ちや価値を知らない市民が多く、これらに詳しい方々の高齢化も相まって、地域内での学習や価値の理解が進まない。
 - 民家や屋敷林の景観や環境、文化等様々な面からの価値の調査や機能の評価は蓄積がわずかである。今後の継承に向けた法的措置や財政による支援措置の裏付けとなる資料等を収集する調査が必要である。
 - 空き家となっていた本陣等々力家の活用を民間事業者と市が連携して進める整備事業に着手した。様々な効果を生み出すために関係者の相互連携が欠かせない。
 - 古民家の価値に関する情報と空き家対策に関する情報は行政内で分散しているため、古民家の居住や利用ニーズに対応した空家活用が十分にできていない。

【方針】

- 民家や屋敷林、水との関わりを伝える地域の宝物（漉し井戸等）の現状確認を行い、今後の保存管理の対応策の検討に活かす。
 - 特色ある集落景観を構成する民家、屋敷林、漉し井戸、堰、石造物などの価値を学校での学習や地域内での活動の場を活かして共有できる取り組みを推進する。
 - 民家や屋敷林のもつ様々な価値を整理し、当市における価値付けの方針を定め、その内容に応じた保存・活用の措置を見出す検討を進める。
 - 担当課と関係課及び事業関係者の連携体制を構築し、着実な事業実施と波及効果創出に努める。
 - 集落内の「空き古民家、屋敷林」に関する情報の集約と共有を行政内で図る取り組みを進め、古民家の所有に関わる側と利用希望者とのマッチングに役立てる。

関連文化財群に関する主な措置

【1A】安曇野の風景を構成する文化財調査 (文化的景観地基礎調査)

- ・過年度に実施した民家や屋敷林等の現状調査を行う。
 - ・特徴的な集落景観を構成する要素とその形成と利水環境の発展、農業の変化等との関係等をもとに、当市の文化的景観の把握と詳細調査を行う

【25A】文化財の新たな指定等

- ・措置1Aの調査結果を踏まえ、新たな文化財の指定等の措置を検討する。
 - 行政、地域（市民）、所有者、専門家
 - R8～15

【42A】継承相談窓口の維持・継続

- ・過去の民家調査で得られた情報や屋敷林を有す古民家についての情報を、空家や緑の相談窓口と共有する。

- 行政、専門家
- R8~15